

最終的に闇堕ち霊夢と 戦う話

カザナミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷を守り続けた博麗霊夢の死から約三ヶ月。幻想郷は、以前の美しさを見受けられない程に荒廃していた。

絶望の未来を変えるため、私は過去に記憶を継承する。こんな未来を、認めないために

目次

過去への逃亡	1
未来を変えるために	8
第3話	15
難易度『死にたいなら』の洗礼	26
本当に痛いんだつてば	46
第6話	58
第7話	84
卒業試験にお使いをやらせるセンスよ	92

過去への逃亡

私の世界は二度、大きく変化した。

一度目は日常の変化。平凡で、退屈な当たり前の日常を過ごしていた。

ただその中で、他者との繋がりはあまり持て無かったという自覚がある。その時は必要だと思わなかったが。

この人間同士の繋がりを軽視していたのが、私が幻想郷という場所に来てしまう要因の一つになってしまったらしい。

外の世界、つまりは今までの日常への帰還も考えたけど、私は幻想郷の雰囲気を感じ入って戻らなかつた。それが、一つ目の変化。

そして、二つ目の変化は：

私が気に入った美しい風景が今は見る影もなく、とある破壊者によって蹂躪されるのを待つだけの逃げ場の無い檻になってしまった事だ。

「はあ……はあ……はあ……」

私はただひたすらに走る。一步でも遠く、ソレのいる場所から逃げるために。もはや人里で逃げ惑う人達の悲鳴は聞こえない。ただ、そこに集まっていた人間を一人も逃がすまいと、未だに攻撃の手を休めていない事だけは分かる。

「あう、!? くっ…」

気が付かない内に足の限界が来ていたのか、私は正面から転んでしまう。

地面で擦った足から鈍い痛みが伝わり始める。けど、ここで寝ていたら破壊者に見つかってしまうかもしれない。限界と痛みで震える足を無理やり動かして、太い樹の木陰へと滑り込んだ。

「は…は…は…いつたい、なあ…」

荒い呼吸を落ち着けようと、一度地面に腰を下ろして足の傷を確認する。

案の定、足には擦り傷が出来ており深い怪我ではないものの、血が滲み始めている。応急処置出来るだけの道具はないので、せめて傷に染みないように体勢を変えようと

したけど、荒い呼吸がそれを妨げる。

「何で……こう、なっちゃったの、かな……」

力無く空を見上げる。私の眩きには答えず空は暗く、どんよりとした色しか映さない。

「ぎゃあああ!?!」

破壊者が暴れている音すら聞こえなくなった方角を伺おうと、少しずつ樹から顔だけ出した。

その瞬間、体を預けていた樹が爆散して私もその場所から吹き飛ばされてしまった。

「ああ、っ……何、が………!?!」

「最後の、一人、ね」

吹き飛ばされた体は重りでも付けられたかのように酷く鈍重に感じる。

それでも体を起こそうと両手を着いて上半身を持ち上げた私の目の前に、この状況を作った元凶の音が落ちてくる。

幻想郷を破壊し、人も妖怪も神様ですら見境なく駆逐していった。止めようと立ちはだかった存在の悉くを灰塵にしたモノ。

「博麗、霊夢……！」

「……………ふふ」

何がそんなに可笑しいのか、体を起こせない私を笑いながら見下ろしている。

それは素敵な楽園の巫女と呼ばれていた彼女からは想像もつかない、酷薄なものだった。

「何で、あなたが…幻想郷を大事にしていたあなたが…！」

「堕霊夢」

「堕霊夢」「ふん！」

「あああああああ!!？」

彼女が手にしているお払い棒。見た目はただ木の棒に半紙が取り付けられているだけにしか見えない。

それが見た目以上の凶器で、人間の肉体をあつかりと貫通するような強度があり、うつ伏せに倒れていた私の脇腹を串刺しにして地面に縫い付けてしまう。

体が痛みという形で必死に状況を伝えるせいでまともに思考が働かない。でもまだ死にたくないとい体は必死にお払い棒を引き抜こうと握り込む。

「はあ……うぐ、ああ……」

墮霊夢（ニコニコ♪）

「助け……殺さないで……死にたくないよお……霊夢……!」

態々人体にとって致命的な部分を外し、抵抗する私を見ている霊夢。

ほら、頑張れば逃げられるかも知れないよ？早くしなきゃ、とでも言いたいのかと内心呻く。

幼い子供が虫の足や羽を千切った後の反応を楽しんでいるかのようだ。

それが動かなくなった後にどうなるか、分かりきっている。抵抗を諦めて命乞いをした私に対する答えは、振り上げたお払い棒を以ての回答らしい。

「させるかよお！」

「何、が？」

避けられない死を間近に目を閉じて堪えたが、まだ死んでいないらしい。

すぐ間近にいた霊夢に多種多様な弾幕が襲いかかっていた。

「ま、魔理沙!? 私、見付かって…」

魔理沙 「早苗え！早くしろお!!」

早苗 「こうなってしまうては、もう時間がありません…あなたの能力を使って下さい
！」

「待って、二人は!？」

魔理沙 「………ちよつと遊んでやるだけだ。後は…いや、前の事は任せませ」

早苗 「お願いします…未来を、こんな世界を認めないで…必ず、変えて下さい…」

幻想郷でも屈指の実力者達が束になっても勝てなかった霊夢に、魔理沙と早苗のたつた二人で挑むなんて無謀でしかない。

それでも彼女達がここに来たのは、私の能力が未来を変える為に必要な為だからだ。過去に記憶を送り、この絶望の未来を変える。それが私の役目。

「約束する!!必ず…必ず未来を変えてやるから!!だから、だから…」

早苗「……」

私の世界は変わった。最後の最後、早苗の言葉を聞くことが出来ずに再びかつての…美しい頃の幻想郷に戻ったのだ。

目的は、絶望の未来を変えること。数えきれないほどの犠牲の上に、私は記憶を過去に継承した。

「絶対に、未来を変えてやる…」

未来を変えるために

最初の悲劇は突然起きた。それは、幻想郷の守護をしていた博麗の巫女の死亡だ。

博麗の巫女というのは幻想郷という神秘が未だに存在している土地を管理している一人らしい。

多くは無いが幻想郷には人間もいくらか住んでいる。ただ、人間以外にも妖怪、神様等が現存している。

この妖怪や神様といった連中は人間に味方している訳じゃない。たまに『異変』といった行動を起こす可能性がある。

この異変を収めるのが博麗の巫女の役割だ。それ以外の奴が解決した時もあつたけど。

その幻想郷にとって大事な役割を担っていた彼女は死んだ。何でも、病死だったそう

だ。
そして、その約三ヶ月後…

幻想郷守護者だった博麗霊夢は、幻想郷を滅ぼす者として甦った。

誰が言い始めたか、噂があつたんだ。死んだはずの博麗の巫女を見かけたよ。

その真偽を確かめる為に何人かが調査に向かうが帰還せず、幻想郷での生活の仕方を教えてくれた私の知り合いも、二度と帰って来なかった。

帰還者が居ないので真相が確かめられず、かといってこれ以上人員を減らすわけにもいかないと上白沢が愚痴を溢す位には困りきっていたそんなある日。

死亡した筈の博麗霊夢が姿を現し、幻想郷のパワーバランスを作っている妖怪や神様何かの居座る場所を片っ端から攻撃し始めた。

彼女の関わった戦いは全て悲惨で、復活した霊夢に対抗するべくパワーバランスを作っていた有力者が連合を組んで戦いを挑んだ。

しかし、霊夢を倒すには及ばなかった。

私は幻想郷に来た時と帰るかどうか聞かれた時しか会ったことが無いから本当の博麗霊夢を知っている訳じゃない。

けど、少なくとも幻想郷に対して攻撃するような人だとは思わなかったし、彼女を知っている人だっただけのような評価をしている。

だが、現実として博麗霊夢は幻想郷の敵になったし、止められる存在はもう居ない。残された人間や力の弱い妖怪は身を隠しながら霊夢に怯える日々を過ごしていた。

私もその中の一人。ただ私には、ある条件下でのみ使える他の誰にもない唯一の『能力』がある。

過去への記憶継承。物品や体の成長等は送れないけど、私にはこの先に悲劇が待ち受けている事を知れる。

始まりの悲劇…それさえ未然に防ぐ事が出来れば、絶望の未来を変えられるだろう。

決死の覚悟で過去へと送り出してくれた魔理沙と早苗の行動を無駄にはしていない。

絶対、絶対にだ…

…

「……………んん」

「……………んう？んん、は」

目が覚めてからまず最初に映ったのは、すぐ真横に広がる地面。

どうやら地面に倒れていたらしい。若干朦朧とする意識を保ち、ゆつくりと地に足を着ける。

「…戻って、これたのね」

記憶を過去に送っているだけだから戻って来たというのはおかしいかも知れないけど、自然と口から溢れた。

木漏れ日が射し込む温かい森林。未来にはもう存在していない光景が、私が好きになった幻想郷を思い出させてくれる。

「取り敢えず……ここ、何処だろ」

さて、絶望の未来を変えるために過去の自分に記憶を送る事は成功した。

少しでも早く未来の悲劇を防ぐ為の行動をしたいんだけど、自分が幻想郷の何処にいるかが分からない。

一度は間違いなく訪れた場所なのは間違いないんだけど…

「グルルルル…」

「……………ああ、そうだった。完全に思い出したよ！」

「ガアアアアア!!」

それはかなり遠い日の事象。けど、私にとっては昨日の事のように思い出せてしまう出来事。

私の世界を変えてしまったその日。幻想郷に迷い込んだ時に、私を殺そうとした妖獣の声だった。

何が起こるのかわかっていた私はすぐにある場所へと駆け出す。

後ろを見なくても知っている。妖獣達は私を追いかけてきている事。

そして、人間の足では逃げ切れない事も分かっている。少しずつ、着実に妖獣の息遣いが近づく。

「…残念ね。ここまで来れたら、私は助かるの」

私のすぐ後ろまで追い掛けてきていた妖獣が悲鳴を上げ、私から距離を開ける。

その原因は直上から降ってきた弾幕に命中したからだ。そして、私と妖獣の間に一人

の人間が降りてくる。

「…往ね」

その言葉を理解できたのか、はたまた理解できなくとも敵わないと本能で理解したのか、妖獣達は森の奥へ姿を消して行く。

「こんな所でうろつく奴が居るなんてね。悪いこと言わないから、もう近付かない方が
良いわよ」

「…」

「無視？それとも喋れないくらい驚いてんの？」

妖獣から助けて貰ったのは事実なので、本当ならお礼の一つでも言うべきなのだろう。

でも、私の目の前に現れたこの人を前にして、とてもじゃないがそんな気にはなれない。
い。

紅と白の対比が目立つ巫女服に身を包んだ均整の取れた少女。それは…

霊夢 「何あんた、もしかして本当に喋れなかったりするわけ？」

いずれ幻想郷を滅ぼし、絶望の未来を呼び込む元凶になった少女。博麗霊夢だったんだから。

「えっと、多分、そうなの、かな？」

霊夢「めんどくさき…(ボソツ)じゃあさつきと外の世界に送り返し、たいんだけど…」

霊夢「悪いけど二日だけ待って貰えないかしら？ちよつと前に大きな仕事を片付けた後でね。境界を安定させておきたいのよ」

「あ、はい。分かりました」

霊夢「…物分かりが良いのは結構だけど、随分落ち着いてるのね？あんた以外にも外人は見たけど、もっと焦ったり、混乱してたりするものなんだけど」

「…い、いや本当はすぐ分かんないけど、でもでも」

霊夢「あー、もういい分かった分かった。黙って私に付いてきなさい。ここじゃ落ち着いて話が出来ないし。それに、今日なら多分来ると思うわ」

「来るっ？」

霊夢「あんたの仮住まいの相談はいるでしょ」

それ以上は話すつもりはねえとばかりに霊夢は私に背を向けて歩き出す。私が追いつけなかったり、見失ったりしないように一応気を遣っているらしい。

そんな彼女の背を見つめる。やがて幻想郷を変えてしまう破壊者になる者の背を見

つめる。

今の彼女が悪い訳ではない。それは分かっている。分かっているが、絶望の未来での仕打ちを知っている私は正直な所、複雑だ。

今すぐにも怒りを叩き付けたい。皆の仇を討ちたい…でも、まだ行動を起こしてない霊夢にそんな事をしたって…

だから今は…静かに、奥深くに、気持ちを沈めておくべきだ。

…

霊夢「やあつと戻ってこれた。歩かないといけないのって、やつぱめんどい…」
「あ、あの…ごめんなさい。私のせいで」

私が妖獣に襲われた場所から博麗神社までそこまで長い距離があつた訳じゃない。でも彼女と私には違いがあるので、いつもよりも長く感じるのだろう。

その違いというのが空を飛べるか否か、というもの。

私はあくまで外の世界で生きてきた普通の人間だ。空を飛ぶなんて出来ない。

でも幻想郷には…正確に言うならある程度戦える者は人間だつて空を飛んで戦った

り、移動している。方法は様々らしいが。

霊夢 「疲れた…お茶飲も」

「あ、あの…私は、どうしたら?」

霊夢 「あーん? だから、二日くらい待っててつたでしょ? まだ葛籠が置かれてないから、今日辺りにあんたと同じ外来人が来るの。そいつと宿かなんか探しなさい」

霊夢 「…丁度良いわね。来てくれたわ」

神社の縁側に腰を落ち着け、一人でお茶を飲んでいた霊夢が空の一点に視線を向ける。

釣られて私も見上げると、大きな籠を背負った少年の姿が見える。

空を飛ぶ、というよりは細かい足場を何度も跳躍しているという様子でこつちに來た彼は中身がどれくらいかは分からないけど、籠の重さを感じさせない軽やかな着地を見せる。

「お待たせしたな。今週分の納品を、と…え、博麗神社に、お客さん!」

霊夢 「賽銭を入れてないからそいつは客じゃない。あんたと一緒、外来人よ」

「外来人？それはまた…タイミングの悪い時に来てしまったな」

葛籠を霊夢の側に下ろし、霊夢は心なしか嬉しそうに葛籠を神社の中に持っていく。
一応彼に私の寢床を相談するという目的があるのに、真つ先に葛籠の方へと興味が向かうのは正直どうかと思う。

「どこまで霊夢が話したか知らないけど、まあ取り敢えず。草渚 興那（くさなぎ おきな）だ。あんたと同じ、外来人だよ」

私はこの人を知っている。私が幻想郷に来てしまったその日から、幻想郷に残りたいと希望したその後も色々々と面倒を見てくれた恩人だ。

けど、彼も…絶望の未来では霊夢が甦ったという噂の真相を探るために動き、そして二度と帰ってくることは無かった。

私はこの人を知っているけど、この時間では彼からすれば私は初めて出会う筈だ。だから、久し振りに言いたい気持ちを抑え、始めてましてと紡ぐ。

興那「まずはあなたがどこまで自分の状況を理解しているか。何でも良い。ここは何

処だとか、言えるだけ言えるか？」

「……ここが、幻想郷っていう場所で、帰るのに二日はかかるって」

興那「成る程…霊夢にしては珍しくちゃんと説明してたのな」

霊夢「なあんか言った？」

興那「別に、気のせいだろ」

霊夢「今結界動かせないからさ、そいつ二日位どうにかしてくんない？」

興那「ここに置いてたら良いじゃないか」

霊夢「色々と面倒いからやだ」

興那「ええ…」

近くに置いて当日にさっさと返す方が楽だと思ふのは、私だけでしょうか？

霊夢「だからあんたが適当にそいつの面倒見ててよ。同じ外来人の方がそいつも気が楽でしょ」

興那「そうとは限らんだろ…まあ、当てがない訳ではないけどさ」

霊夢「じゃあ決まり。もう決まり。そういう事だから、後は興那に聞いてね！じゃ、もう用事も無いでしょうし帰った帰った」

「何なのこの人…」

興那「まあその…気を悪くしないでくれ。誰に対してもこうなんだ」

それはそれで問題だろ。

…

興那「風圧とか平気？」

「あ、はい、大丈夫です！」

興那「それにしても悪いね。早く家に帰りたいたらうに、こっちの都合に合わせて貰ってさ」

「お気になさらず…」

博麗神社から歩いて人里まで行くのはかなり時間が掛かるからと、先ほど彼が持ってきていた背負い葛籠の中で私は何とか言葉を返す。

乗り心地はそこまで良くないけど酔うほどではない。気分転換に下の方を眺めてみる。

「…やっぱり、綺麗だよね」

未来では、最早どうあっても見ることもない景色に思わずそう口にしていた。

青々とした木々に、底まで見える澄んだ川。そして、空を駆る者にだけ感じ取れる冷たい空気が肌を撫でる。

興那「気に入った？」

「うん…もうずっと、眺めていたい位に」

興那「はは、同感だがここで生きるのはオススメしなかなあ…ここはここで、色々あるからさ」

興那「あ、そういうえば二日住む場所があるんだったな。安心してくれ。ちゃんとそういう場所があるんだ」

「うん…」

私は思う。私は絶望の未来を変えるために記憶を過去に送った。では、私とその未来の話をしたからといって未来が変わるだろうか？

いや、多分変わる事はない。いきなりそんな話をした所で誰にも信じて貰える筈がないから。

それでも霊夢が死ぬ時は来てしまう。だから、その時が来る前に協力をしてくれる存在を探そう。

「興那、さん」

興那「んー？」

「私、幻想郷に住みたいです。どうすれば、良いですか？」

興那「ええ!?!本気で言ってる? 何でまた…」

「…どうしても、大事な事なんです」

興那「何だそれ、幻想郷に住むのが大事な事なのか？」

「…」

興那「…ま、外の世界から幻想郷に来るような奴だ。言いたくない事くらいあるわな」
「ごめん、なさい…」

興那「いや構わんよ。じゃあどうするか……まあ、外来人が幻想郷で生き残りたいならどこかに後ろ楯になつてもらうのが確実かな」

「後ろ楯？」

興那「ああ。上手く取り入れれば衣食住の保証を心配しなくて良くなる。下手に手を出したら、おっかないのが出てくるって妖怪に対する牽制にもなるしな」

興那「じゃあこうしよう。取り敢えず俺が話を通しておくから、一週間位研修みたいな感じで住んでくれ。途中で無理になったらそのまま外の世界に送り返す。そうしよう」

彼は私が途中で止める為の逃げ道を用意しているが、私はそれを使うつもりはない。記憶を継承出来たのが私だけだから、もし死ねばその瞬間絶望の未来が確定してしまう。

それを防ぐには、一人でも多くの理解者が絶対に必要な。それに、理解者が強い存在であればそれだけ状況に対応しやすくなるだろう。

「じゃあ、紹介して下さい!」

興那「本気なのか…えつと…」

人里 一番安全

命蓮寺

——割りと安全

神靈廟―

白玉楼 ―多分死ぬ

紅魔館 ―死にたいなら

フリーランス ―強くて二週目前提

……うん、こんな感じかな」

下半分の難易度爆上がりでヤバい……
てか何だよ強くて二週目って！

ただ、命蓮寺や神靈廟で修行者を募っている」と聞いた事はある。下半分はともかく、この二つは一度体験しての方が良いかも。

興那「ま、選ぶのはお前次第だ」

「……ちなみに、興那さんはどこ？」

興那「フリーランス」

「なるほど……色々と、納得かも」

難易度『死にたいなら』の洗礼

「あああああああああふざけんなクツツソがああああああ!!?」

私は身に降りかかった不運に盛大に毒づきながら必死に足を振り上げ疾走する。

呼吸などとつくに乱れて心臓が忙しなく酸素を超越せと喚き散らす。

既に疲労困憊状態であるが、現在私には走りを止めるといふ選択肢はない。

何故なら、私の真後ろから身長を軽く越える鉄球に追い回されているという状況だからだ。

「おら急げ急げ。もうすぐ出口だぞ」

「くそ、くそ、くそおおおお!!?」

身体能力を越えた走りをしている事で、いつ崩れ落ちてもおかしくない。

それでもなんとか、もう自分でも執念としか言い様のない有り様で聞こえてきた声の

言う出口に間に合った。

扉は無く、鉄球が通れない程度の細い道に飛び込む。後ろから来ていた鉄球は狭い道の口に当たって轟音を上げて戻る道を閉じたけど、何とか私は無事だった。

「ヒュー…ヒュー…つ、つかれ…息、が」

「おいおい、何安心してんだ？まだ最後のお楽しみがあるだろう？」

「お、お楽しみつて…こつち、は、それどころじゃ…」

全力疾走してきた私に休みを与える間も無く、仰向けに倒れていた私の視界には、刃物をぶら下げたどんどん下がってきている天井が写る。

鉄球といい、釣天井といい、何かの映画のセットかよと思う。でも、その仕掛けは本物だ。このまま何もしなければ、私は本当に殺されてしまう。

だから、どんなにしんどくても立ち上がらなくてはならない。

「ハッハー！日本産ミートソースの出来上がりだ！オキナには俺から言つといてやるよ。お前はお嬢のスパの材料になりましたつてなあ！」

「最、悪…！」

少し前の自分の選択を恨む。こうなるって分かってたら、絶対に関わらなかつたのに
：
どうして私がこんなデスゲームじみた事をやらされているのか、それは私がとある場
所に関わってしまったからだ。

・
・
・

幻想郷で外来人が生きていくのはかなりしんどいという経験者曰く、そういう時はど
こかに後ろ楯になってもらうのが良いらしい。

いくつかの候補をあげてもらった私は、取り敢えず紅魔館という所に行ってみる事に
した。

教えてもらったのだが、紅魔館には吸血鬼という妖怪やらが居る幻想郷でも強い部類
の化け物が当主を務めているらしい。

危険な相手ではあるが、話はできるとの事で興那から紹介状というのを持たされてそ
れらしき場所に来た。

「あ、もしかしてあれかな？」

森の湖近くにミスマッチな洋風の外壁。遠目からでは中がどうなのか確認出来ないけど、近づいてみよう。

…というか、何で私は「死にたいなら」とか言われるような所に来てしまったんだろうと今更ながらそう思う。

普通なら絶対にそうしないんだけど、何かこう、何かの運命の流れがそうさせたというか…分かる？ないか…

「お、あれは…人、かな？…他に入り口は、近くには無さそう、かな…よし」

「あのー、すみません。ここは、紅魔館で間違いないでしょうか？」

「…珍しい。ええ、合っていますよ。どんなご用件でしょうか？」

「興那から紹介状を…これを」

「あー、なるほど。少しだけ、本当に少しだけ待って下さい。お嬢様に伝えてきますから」

「あ、はい」

見た感じ、正面門の監視をしていた女の人は一度中に戻ったと思ったけど、またすぐに出てきた。

伝えて来るのでは？という顔になってたんだろう。「すぐに伝わりますよ」とこちらににこにここと笑いかける。

それから本当に時間が掛からずにノックしている音が聞こえて私を迎えようとしているのか、それとも何処とも分からない場所へと引き摺り込もうとしているのか、目が痛くなるような紅い屋敷への門が開いた。

「お嬢様がお呼びです」

開いた門のその先：件の紅魔館を目にした瞬間、何故だか酷く体温というか、背筋が冷えるかのような緊張感を感じる。

人間の直感等を私は信じた事はないが、私の意思に関係なく体そのものがここへの立ち入りを拒んでいるかのようだ。

しかし今更引き返す訳にも行かない。緊張によって乱れかけていた呼吸をゆつくりと落ち着け、入り口に来ていたメイドさんの方へ歩いて行く。

私の後ろで門が静かに閉まる。もう、引き返す事は出来ない。

（落ち着かないなあ…）

銀髪のメイドさんの後に続いて、お嬢様の所に向かっているが、どうにも落ち着けずに色んな所へ視線を飛ばしてしまう。

まだ夕方でもないのに館内は窓が少なく日が入りにくいか若干薄暗い。

前評判の「死にたいなら」と聞いていたのもあって、自分の足音にすら驚きそうだ。

「着きました。くれぐれもお嬢様に対し、礼を欠くことの無いようお願い致します」

「はい」

「…お嬢様」

「入れ」

その部屋の中で一際目に入る、誰かの姿を見る。それは、幼い人間の幼女のような姿をしていた。

だが、一度相対すれば事前情報など無くても普通ではないと嫌でも理解してしまう。

「さて…興那からこの事を知ったそうだが…私に分かるか？」

「…吸血鬼だと、そう聞いてます」

「なんだ、そこを聞いてたのか。驚かせようと思ったのに…なら、別に隠す必要もないか」

「!?羽が…」

そう、目の前の少女から人間にはあるはずのないコウモリのような黒い翼が出てきたのだ。

こちらが面食らっているのを一瞥せずに、部屋の中心の椅子に座ってからようやくこちらに目を向ける。

レミリア「初めまして、人間。私はレミリア・スカーレット。紅魔館の当主をしているわ」

「えっと、はい。初めまして…早速ですけど、私は預かった物がありました」

レミリア「ふうん…興那からの紹介状か」

「ん!? っであれ!? いつの間に…」

レミリア「…まあ、どうせ暫くウチで預かれとかそんな内容でしょう…はっ! 下らない」

持っていた紹介状をいつの間に抜き取られた事にも驚いたが、レミリアは紹介状を眺めただけで中身を確認せずに握り潰してゴミ箱へと放り投げた。

どこが話を通じるだよ…全然怖いやつじゃないか…

レミリア「さて、どうしてやろうかしら? この人間。ここから立ち去るか、それとも私に従うか…」

「し、従うって…?」

レミリア「決まっているでしょう? 私の下僕として従うのか、どうするか…役立つはずは要らないのよ。お前の運命は、お前で決めなさい」

「わ、たしは…」

怖い…本当は人間ではない存在と話しているなんて状況が堪らなく怖い。

近くに居るだけで私なんか押し潰されてしまいそんな存在に自分の命を預けるなん

て本当はしたくない。でも…

「わ、分かつ…分かりました。でも出来れば、一週間だけ、お願いします」

絶望の未来を思い出す。私は、その未来が訪れるのを阻止するために、私自身で何とかしなきゃいけないんだ。

レミリア「えマジか…いや、ふむ…一週間という期限がよく分からないが、まあ良いだろう」

レミリア「但し、さつきも言ったが役立たずは要らん。例え一週間だろうと、お前は私の下僕として恥じない働きをするように。それさえ守れば、悪いようにはしないわ」

「はい、分かりました！」

レミリア「…咲夜、部屋を一つ用意。月下とこいつを使えるようにしておくように」

咲夜「承知しました」

レミリア「行け」

・
・
・

「ぶはああああ…すつこい、怖かったあ…」

咲夜と呼ばれていたメイドさんに案内してもらった部屋のベッドに倒れこみ、深く息を吐き出す。

でもこれは仕方ないでしょ？あのレミリアとかいう吸血鬼。見た目は子供の癖に威圧感半端ねえんだもん…

咲夜にしてもなんか必要最低限の事しか全然喋らないし、こつちを見るときめつちや睨んでくるし一般人からしたら怖いよもう…

今は予定が組み終わったら呼びにくるとか言われてるから待つてるけど、改めてすごい所に滞在する事になったなあと思ってしまう。

「失礼します。予定調整が出来ました」

「あ、はい…誰だろ、咲夜じゃなかったな」

役立たずは要らないというレミリアの言葉がよぎって急いで部屋から出る。もしやる気が無いとか思われたら、どうなるか分からないし…

「こんにちは。あなたが本日からお嬢様に仕える外来人ですね？」

「は、はい！よろしくお願ひします！」

「元気があつて嬉しいですね…ありがたい限りだ（ボソツ）」

「え」

「？」

咲夜の代わりに私を呼びに来たのは、ここまで洋風だった雰囲気とは反対に、日本の礼服を身に付けた少年だった。

咲夜と違い、ニコニコと愛想の良い執事なのかな？

「いえいえ、私は執事ではありませんよ」

「え、すご…何で分かつたの？」

「ただの勘です♪それより申し訳無いのですが、本日の仕事場所まで歩きながら予定を説明してもよろしいでしょうか？」

「あ、はい今行きます！」

月下「では改めまして、私は朔日 月下（さくじつ げつか）と申します。メイド長

の咲夜と同じく人間ですが、縁あってお嬢様に仕えております」

さっきの咲夜もそうだったが、この人も人間だったのか…

月下「あ、もしかして本当はもつと見るからに人外だらけだと思ったのにと思いましたか？」

「うえ!?!ま、また…」

月下「ふふ、ここに来た人は大体似たような反応をするんですよ」

そりやそうだな。

まあ、でも二人も人間が居るといっただけでも少しだけ安心というか気休めにはなる。咲夜はどうか分からないけど、月下は話してくれるし仲良く出来るかも。

「所で、何処に向かっているんですか？」

月下「ん? ああ、地下室ですよ。あそこは手入れが大変なんです」

「先ずは掃除からやるんですね?」

月下「ええ、はい。足元、気を付けて下さいね。その先のドアが今日の仕事場所です」

「よつとと……ここでもいいのね?」

月下「…」

「んん? 何か、別に汚れてるとか無いような…月下さん、これ(ガチャン!) え」

月下「…」

「ち、ちよつと、月下さん? 何で扉閉めたんです? え、月下さん?」

月下「これより、楽しい楽しい紅魔実習基礎能力編を実施する!」

「ふあ!」

次の瞬間、地下室からはシューという音と共に、何か妙な臭いが立ち込め始める。

何かおかしいと入ってきた扉に手をかけるが、そこは月下に閉められた際に完全に開かなくなっていた。

「ちよつと月下さん! ここ開けて下さい!! 速く!」

月下「そいつは出来ねえ相談だなあ」

「げ、月下さ、ん?」

月下「良いか、よく聞け? その部屋に流しているのは毒ガスだ。お前が死ぬ前にそこから逃げてみせな! そしたら話くらいは聞いてやるよ」

月下「最近は挑戦者が居なくて妹様も退屈してたからな。期待してるぜ外来人？」
「うっそだろおい……！」

・
・
・

ええ、まあそんな訳で冒頭に戻るんですねこれが。あれから本当に大変だったんですよ。

毒ガス地帯から抜けられたと思ったら次は水責めをされるわ、外れの床を踏み抜いたら針が突き上がって足を貫かれそうになるわ。

そして鉄球に追い回され終いには釣り天井というね。もう自分でもここまで生きてるのが不思議な位だ。

「ああ、クソクソクソ……何とかしないと……」

刻一刻と、鋭利な刃物が付いた天井がずり下がってくる。

そのプレッシャーは相当なものだが、ここまでやったのだ。絶対に生き残ってやる。

月下「60…50…40…30…20…」

が、実際の所この状況を打破するようなヒントは見つけられない。

月下のカウントダウンが余計に焦らせ、天井はもう私から一メートルも離れてない場所にまで降りてきていた。

「…ああ、もう！出し惜しみしてらんない！やってやるわよ！」

「サムワンスメモリー………インストール……『グレイソーマタージ』!!」

私の記憶に、私のものではない別の記憶が瞬間的に流れ込む。

その記憶が行うままに、私の体は実際に起こる現象を再現する装置としてだけに定義する。

降りてきていた釣り天井は人間一人には十分な隙間が出来上がる。完全に下がってきて仕掛けが動かないことを確認し、正面の扉に手をかける。

月下「Fooooo!踏破おめでとう!やるじゃねえか！」

「()の野郎……」

月下「お、何だよ不満そうだなあ。でも終わって見たら楽しかっただろ？ イン？ イー？ ヨーンズみてーでよアーハツハツハツ！」

「イン？ イーじゃなくてS？ Wだよクソが…」

扉を抜けた先で月下が陽気に迎えた事で本当に終わったのが分かったが、こっちは满身創痕なのに笑っているこいつをみると本気でイラついた。

月下「…ただ、お前が最後に使ったアレ…見覚えがあるぞ。そう、確かありやあ…：…あれだ。守矢の巫女モドキのスペル技だったな」

月下「みよーうだよなあ。お前、幻想郷に来てから数日の外来人だろ？ それが何の練習もなしに技の真似撃ちをした？ 変だよなあ？ ああ、なるほど」

月下「お前、なんか変な能力持つてるな？」

「…それは」

月下「ああ、いやいや説明しなくていい。そうだなあ…お前のここまでの身のこなしなんかは正直ただの素人だ。俺から見てそう思った」

月下「だが、さっきの『グレイソーマタージ』だけはやけに的確に撃ってたんだよなあ

………」

月下「ふふん、読めたぞ。お前、多分記憶に関係する能力があるだろ。そいつでスペル技を真似撃ちしたな？」

「!!」

この人…ふざけた態度とは裏腹に、たった一度の能力使用でそこまで理解出来るのか!?

いや、たったあれだけのヒントでここまで見切れるから人間でありながらレミリアの下に付けるのか!?

月下「ま、本当にそうだとしたらお前がいつサナエに接触したんだよってなるから違うか。まあでも、イイ線いつてるだろ？」

「そう、ですね…」

月下「ということとは…お前をここに置いてたら他の奴の技とか、お嬢の技まで使えるようになるかもしれないねえ訳か…」

「…」

月下「イッヒツヒ。その能力もだが、さっきの研修で見せた根性も気に入ってたんだ。お前の事はシスターと呼ばせて貰うぜ」

「は、はい!?!何で!?!」

月下「そうしたいと思ったからに決まってるんだろ。俺の事もブラザーと呼んで構わないぜ!」

「ブラザー…いい、いや待ってよ。私の能力何となく分かったんでしょ!?!なのに置いておくの?」

月下「オモロイやん」

「ええ…」

何か、最初に接した時と今とで月下のイメージが全然違う…最初は物腰の柔らかい格好いい人だったのに…何だこの人…

月下「おっと、もうタイムリミットか。新人いじめに時間を使いすぎたな」

「いじめ!?!」

月下「一回風呂入ってから食堂に来てくれ」

「…何かあるんですか?」

月下「何って3時のおやつに決まってるじゃないか」

「3時のおやつ!?!」

月下「知らないのかい、シスター？3時っていうのは人間が一番食べた物を脂肪にしてくくて、育ち盛りの時は一番カロリーのを要る時間なんだぜ？」

「あ、そうなんすね…」

月下「ああ、まあ夕食が入る程度だな。今日は俺がアップルパイを焼いてやる日だ。その前に、その格好を何とかしてこい」

「分かりまし、た…」

月下「ま、今日の体力を作るといってお前の仕事は終わりだ。後は部屋で休んでて良いからな」

あ、今日は終わりで良いんだ…いや、これ以上何かしろとか言われても何も出来ないけどさ…

月下「メイド妖精！三人位!!」

メイド妖精ABC（わたわた…）

月下「シスターを風呂に案内。着替えの用意。風呂が終わったら食堂に連れてこい」

メイド妖精ABC（ビシッ！）

あ、何かちっちゃい女の子みたいなのがメイド服着てる。結構かわいいかも。

指示を受けた三人のメイド妖精？は月下の指示をこなしているけど、それ以外のメイド妖精はどこか萎縮しているような雰囲気を感じる。

紅魔館での生活一日目。たった一日なのにここまで濃い時間を過ごすことになると思わなかった：

デスクゲームの疲れもあるし、その日は本当に吸い込まれるように眠ってしまった。

あ、あとおやつのアップパイ目茶苦茶美味しかったです。

きを阻害する。

そんな状態であるにも関わらず、咲夜さんに容赦なく家事を叩き込まれている。ただでさえあまりの痛みと永続性で歩き回るだけでも泣きそうだ。

「つか、どうやって上の方まで掃除したら良いんだろ…」

咲夜さんに終わらせておけと指示されていたとある一室の窓は軽く私の身長を越えている。

近くに脚立でもあれば良いんだけど…

月下「よおシスター！元気かなあ？」

「こ、この野郎…誰のせいであんななつてると…」

月下「イヒヒ！元気そうで何よりだ！」

「痛…笑えないよ…」

窓の掃除をどうしようかと考えている私の所に、昨日と同じく礼服を身に付けた少年が笑顔で訪れる。

ただ、こいつは私が今現在悩まされている筋肉痛の元凶だ。

月下に騙されて地下に入れられた私に対し、本当に死にかねない危険なゲームを強要してきた。生還できたのは、奇跡としか言いようがない。

「ああ、そうだ月下さん。脚立どこにあるか分かりませんか？」

月下「脚立？そんなもん何に使うんだよ」

「いや、咲夜さんに窓付近の掃除を言い付けられて」

月下「んー？……あ、そうか。シスターは飛べないんだったな」

月下がようやく思い至ったと納得したように声をあげる。

というのも、私の知っている限り幻想郷で一定の強さがあるものは、殆んどが空を飛ぶことが出来るというらしい。

人里近くで生活していた未来では、空中で行われる弾幕勝負を何度か見たことがある。ここの住人も、例外ではないらしい。

月下「全く…そういう時は頭を使え。飛べないなら、跳んで掃除をすりゃいいんだよ」

「？」

月下「まあ見てな」

そう言うところからか洗浄スプレーと布巾を用意する。

トツ…と静かに窓の頂点まで跳躍した月下はそこから掃除作業を行い、重力によつて落ちながらあつという間に終わらせてしまった。

月下「な？簡単だろ？さあ、シスターもやつてみな」

「無理言わないで下さい」

残念ながら普通の人間には身長を越えるような跳躍力はないし、落下途中に掃除が出来るような手際もあるわけではない。

空を飛ばない事への対抗策としてこれは出来るやろ？みたいな顔してんじゃねえ。

「んくく………やつぱり無理だよ……」

月下「おいおい、そんな調子で大丈夫か？明日からは家事に加えて、シスターの鍛練も同時にやるんだぜ？死ぬじゃねー？」

「ちよ、ちよつと待ってよ!?鍛練!?何で私がそんなことしなきゃいけないの!?!」

月下「はあ？限られた期間とはいえ、お前はお嬢の下に付くんだぞ？情けないまま他の奴と顔を会わせたら、お嬢の評判に傷が付くやろが」

月下「安心しろよシスタあ。お前が一週間持ち堪えられたら、幻想郷のどこに行っても生活出来るようになってる筈だぜ」

そうは思えないけどな……まあ、初日からいきなり殺しにかかれるのはここぐらいだろうし、生活だけなら出来るようになるのかも。

「思ったんだけど、月下さんってレミリア……お嬢様の事、どう思ってるの？吸血鬼なのに、随分入れ込んでるみたいだし」

月下「当たり前だろ。入れ込むもなにも、お嬢一筋だぜ！もうお嬢しか勝たん！」

「そ、そうなん？」

月下「お前はお嬢を見て何も感じなかったのか？幼く愛らしい様子の残りながらも紅魔館を治める当主としての威厳ある双貌……吸血鬼という上位種族ながら部下への思慮も深く、お嬢への良い行いは必ず評価してくれる安心と信頼できる人生を捧げるべき唯一にして無二の存在。それがお嬢なんだよ！」

「お前レミリアの事になると早口になるね」

月下「お嬢！（。▽。）〇シ。お嬢！（。▽。）〇シ。」

咲夜「今戻ったわ。あなた、窓のお掃除は終わっ…た…」

「あ、咲夜さん。すみません、今脚立を探そうと…ひい!？」

お嬢様との用事が済んだんだろう。戻ってきた咲夜は私と月下がいる所を見た瞬間、露骨に嫌そうな険の浮かび上がった表情になった。

その様子に気圧されて一歩後ずさった私と特に気にした様子もない月下。咲夜は一度窓枠へと足を進め、縁を指でなぞる。

咲夜「…月下、その子に手を貸したわね？」

月下「あ？そうだよそれがどうした？」

咲夜「お嬢様からは使えるようにしろとのお言葉よ。それに反するつもり？」

月下「窓掃除がそんなに大事か？時間の無駄遣いでお嬢の命令に逆らおうとしてんのはどつちだ、おおん？」

咲夜「あなたは順序というものがまるで分かってないみたいね？流石、普通の人間である彼女を初日で殺しかけた人の言葉には説得力がありますわ」

月下「ハッ！口先だけはペリカンみてえにでかくなつたみてえだな駄メイドさん

よお。お前が役立たずだった時にやらかした後始末をしたのは誰だ? ん?」

咲夜「一々昔の事を持ち出さなければ反論出来ないだなんて、いつまで経っても精神が成長してないのね? だからペド野郎なのよ」

月下「F? k?」

この人達なんで急にいがみ合い始めたの: ? 掃除のやり方なんてどうだって良いじゃんか: :

「あの、次からは前もって脚立とか足場を用意しておきます。だから、その: :」

月下「じゃあこうだ。シスター、この場合俺とサクヤどっちが正しいと思う?」

「ふあ!?! いや、私!?!」

咲夜「そうよ。私と月下、どちらがあなたに合うのか」

どっちも合わねえよ!!

: : だなんて、口が裂けても言えないよなあ: :

レミリアも、もう少しマシな人事を考えた方が良いと思うんだけどな。いざという時に、内部崩壊するでしょこれ。

「ちよつと、咲夜と月下〜？また喧嘩してるの？」

咲夜と月下の二人への返答に困っていた所に、眠たそうな声が掛けられる。

とても仲裁に入れるような雰囲気では無かったけど、お構い無しにこちらへと歩いてくる姿がある。

身長は私よりも低く、とても綺麗な金髪をサイドにまとめているレミリアと同じ位の幼女だった。

月下 咲夜「失礼しました、妹様」

「あー、そんなの良いつて。たまたま通りかかったただけだしさー…ん？」

「な、何…」

「あなた、知ってる。昨日、月下に遊ばれてた女の人だわ」

幼女が来た瞬間、月下と咲夜の二人が大人しくなったのにも驚いたが、その幼女は私を見ると近付いてきて顔を覗き込んできた。

そして、昨日のクソゲーの件で私の事を知っていたようだ。その事を理解すると一頻

りケラケラと笑った後、スカートの裾を持ち上げておじきをする。

フラン「初めまして、私はフランドールと言うの」

「は、はい！初めまして！私は、昨日からここで働くようにレミア様から言われてます」

フラン「…だろうね。ねえねえ！お姉さん、良かったら私と遊びましょうよ！丁度暇だったんだよね」

「かわいい…じゃなかった。えっと、今は…」

咲夜「妹様。申し訳ありませんが、現在仕事中です」

フラン「えええ!?やだやだやだ!?二人ばかりお姉さんと遊んでてずるいわ!」
「いや、別に遊んでる訳ではないんだけどね…」

月下「お嬢のお言葉ですので…どうかご理解を」

フラン「……………ふーん。だったら、咲夜か月下。仕事教えるのに二人も要らないでしょ?どつちか、私と遊んでよ。それとも…」

フラン「全員一緒に、遊ぶ?」

な、何だろう。急に全身の血液が冷えきったと錯覚するような悪寒が走った。

丁度それは駄々を捏ねていたフランちゃんが、冷静に反論をした瞬間だったような気がする。

この悪寒の正体はフランちゃん？ いや、それはないか。

月下「hahaha…ご冗談が過ぎますよ。妹様…」

「少し位は良いんじゃない？」

咲夜「！（ジツ）」

月下（コクツ…）

咲夜「いえ、駄目よ。あなた、まだやることも一通りやってないでしょう。さっさと来なさい。早く！」

「いっただい！待って咲夜さん、痛い！痛いです！引つ張らないで！」

月下「方針の論争はまた今度だな…妹様。そんなに元気があるのでしたら、やり残したお稽古の続き出来ますよね？」

フラン「つまらないからやりたくない〜！壊さないからお姉さんと遊ばせてよく！」

月下「後にしてください後に！ご飯後に遊ぶ時間を取って貰いますから」

フラン「また後で！？いつも月下と咲夜はそうじゃん！後でするから後で良いでしょとかさあ！いつもいつもいつも！！」

月下「それは、もう許して欲しいとしか言えません！でも嘘は言いません、なあサクヤ！」

咲夜「勿論ですわ。我々はお嬢様と妹様に嘘など付きません。分かって下さいませ」「ごめんねフランちゃん。私の仕事が終わったら、一緒に遊ぼうね」

フラン「うん♪じゃ、また後でねお姉さん！」

途中、痲癩を起こしてそうだったフランちゃんだけど、最後にはこつちに笑いかけながら走り去っていった。

可愛い女の子だったけど、どういう経緯で紅魔館に居るんだろう？

月下「はあ…何とかなかったか。シスターよお、あまり『遊ぶ』なんて安請け合いするなよ？」

「?…何で?」

月下「何でも、だ。…取り敢えずあれだ。本当に遊ぶ事にして妹様には満足してもらう方向で」

咲夜「妹様がそれで大人しくしてくれるかしら」

月下「それをどうにかするのが俺らだろ。一応、なんか新しいゲームないかちよつと

見てくる」

咲夜「ん。ついでに買い出しをしてきて頂戴。はい、これ」

月下「y e a h」

「…」

咲夜「何よ？」

「いや…そうやってお互い協力出来るなら、いがみ合う必要のないのって思ってた」

月下「シスターって、なんか急にズケズケ言うときあるよな」

そんな踏み込んで言うてはないと思うんだけどな…

まあでも、仕事終わった後に遊べる時間があるなら少しは気持ち程度楽にはなりそう
ね。

第6話

ここ数日で、赤の配色が多すぎる紅魔館にも慣れてきた本日。私はしばらく振りに外の景色を見られる事になりました。

ただまあ…間違っても紅魔館の住人達が善意で私に気分転換をさせようとしている訳でない事を知っている。

だってこいつら、初日から一般人相手にデスゲーム（本気）をやらせたからね！何が教育だふざけんな!!

フラン「ピクニック♪お姉ちゃんと一緒にピクニック♪」

月下「妹様。何度も言いますが、今回は遊びに来てる訳でないですよ？」

フラン「分かってるよ。そっちの邪魔はしないって」

「…でも、大丈夫なのかな？フランちゃん、危ないと思うよ？」

私は自身の左腕にしがみつくと金髪の少女にそう訪ねる。

というのも、私達が今を生きているこの場所。

幻想郷という場所なのだが、何処か懐かしさすら覚える美しい原風景とは裏腹に、その実人間には生きずらい所なのだ。

その理由として何よりも、妖怪という存在が実際に存在しているという事が上げられる。

当然ながら、ただの人間に抗う方法はない。普通なら、だが。

フラン「大丈夫だよお姉ちゃん！月下が何とかしてくれるのよ♪…ね？」

月下「……………まあ、俺の仕事は果たしますが。ただ、あまり好きにされますと後でお嬢に言われるのは我々ですので」

フラン「はあくあ…月下も咲夜もお姉様お姉様つてそればかりねえ。つまんないわ」

月下「はいはい。それではこちらの邪魔はしないで下さいねー？待たせたなシスター。今日の目的、早速取り掛かろうぜ？」

月下「紅魔式…青空教室をな！」

要するに今日は、何故か外に出てお勉強をするらしいです。

・
・
・

今日の早朝 中庭広場にて

外の世界で使っていた布団よりも寝心地の良い布団から出たくないなあ：等と思いつながらベッドから這い出て身支度を行う。

今日は何をやられるだろ：と少し憂鬱になつてはいたが、ここでの暮らしは私が望んだ事でもある。

よし、今日も頑張ろうと貸して貰っている部屋の扉を開けると、咲夜さんが立っていた。

居るなら声かけろよと一瞬思ったが、どうやら月下が朝礼をするそうなので、出ろとの事だった。

「咲夜さんは出ないんですか？」

咲夜「月下が勝手にやってるだけだし。私がそんな無駄な事をする理由もないから」

思ったよりバツサリだった。

で、実際中庭に行ってみただけで私が思ってたよりも従業員は多かつたらしい。

メイド妖精、咲夜曰くホフゴブリン。中には頭に羽のような何かを着けた…あれはどういう存在？

とにかく、紅魔館には主にそれら部下達が体育館3つ分位にもなりそうな数が雇われていたらしい。

月下は…あ、居た。演説台に立つて皆を見えるようにしてる。私は…適当にその辺に居れば良いのかな？

月下「えー、皆さん！お↓は←よ→う→→ございます!!」

メイド妖精 ホフゴブリン 小悪魔 「「お…おは、よ…ま、す…」」

(うわあ…全然まばらだ…)

月下「なんだお前ら、揃って声が小さいなあ？朝って言うのは、その日一日で一番エネルギーがある瞬間なんだ！そんなじやお嬢に声が届く訳ないやろが!!」

いや、別にレミリアに声を届けようなんてやってる奴居ないと思うよ？

月下「……………次声が小さかったら、気紛れに誰かの頭と体を永遠にお離婚さんな…せ

い！ぷりーず!!」

月下「お↓は←よう→→ごぎいます!!」

メイド妖精 ホフゴ布林 小悪魔 「「おはようごぎいます!!!」」

月下「なんだやれば出来るんじゃねえか。最初からやれよな」

いや脅してる!?!恐怖で無理矢理やらせただけじゃないか!?

皆が恐怖で引きつってる中でやりきった、みたいな顔してんじゃねえ!

小悪魔「あ、あのーすみません、月下さん…その、良いですか?」

月下「ああ?どうした、未だに名前が確認されてない小悪魔さん?」

小悪魔「名前が出てないのは別に良いじゃないですか!?!」

小悪魔「そうじゃなくて、これってなんのための朝礼なんですか?」

月下「ああ、それな。えー…一部の奴はもう知ってると思うが、一週間程うちで人間を預かる事になった」

月下「挨拶なり親睦を深めるなりは好きにしろ。ただ、それでサボる奴はころ…お仕置きな」

月下「それと、俺は今日シスターの勉強の監督をするから夕方まで帰らん。何かあつ

たらサクヤかメーリンに言うように。他に質問は？」

メイド妖精　ホフゴブリン　小悪魔　「…」

「…」

月下「無いって事な。じゃ、今日も一日お嬢の為に頑張るように。解散！」

体感10分にも満たない程度で朝礼は終わった。それを確認した皆は散り散りになつていく。

さつき私の事を話題に上げられたので、一部興味がありそうに私を見てくるのも居たけど、話しかけられはしなかった。

月下「ああ、シスター。お前はこっちな」

行き場に困ってぼっ立ちしている私に月下が手招きで呼び掛ける。

さつき私の勉強の監督を言うと書いていたな…それについての話だろうか？

月下「今言ったと思うが、シスターにはこれからお嬢の元で働く者として勉強をしてもらう。筋肉痛はどうだ？」

「もう殆ど大丈夫だけど…何でそんなこと聞くの？」

月下「その勉強は外でやる方が都合いいんだよ。なんだ、百聞は一見にしかず…だっけ？」

「外で勉強？まあ、良いけど」

月下「ま、嫌とか言われてもやんだけどな！じゃ、俺は紅魔式青空教室の用意しとくから。それまではメーリンと庭の手入れでもしててくれな」

「はい！分かりました！」

月下「……………」

「？何？」

月下「いや…少しは良い顔になったなあってだけだ」

月下「おっと、別に元の顔が悪かったとかじゃねえぞ？どちらかというシスターの顔は好みだぜ！」

「私はあなたみたいな性格クソ野郎お断りですけど」

月下「そりゃ無いぜシスター!？」

「もう行きますね…あの、メーリンさん？って何処に居るんですか？」

月下「あん？ここに来たなら顔は見たろ。ほら、正門で立ってなかったか？」

……あの人か。確か、紅魔館の前で見張りをしていた人がいたな。

特徴は…赤い髪、羨ましい位のスタイルの良い女の人だ。朝礼には居なかったけど、出入口に行けば会えるだろうか。

...

「メーリンさん。ちよつといいですかー？」

この数日間、紅魔館と外を隔てる境界である正門を三度ノックしながら声をかける。

こつちにメーリンさんが居なければ、既に中庭の手入れを始めているということなので、私も移動しなければならぬ。

しかし向こうからは「どうかしましたかー？」と返答が帰ってくる。無駄に歩き回らなくて良かった。

「月下さんが青空教室？をするらしいんですけど、準備に時間かかるからメーリンさんと一緒に中庭の手入れしとけって言われました」

美鈴「あ、それはありがたいですね。今行きます」

少しだけ開いた門から私の思っていた通りの女性が入ってきた。ここに来た初日に、この監視をしていた女性だ。

メーリンさんは門の側に置いてあつた庭の手入れ道具一式を軽々と持ち上げ、行きましようかと微笑む。

…結構な重量だと思ふんだけど、重たくないのかな？

「メーリンさん、重たくないですか？私もいくつか持ちますよ」

美鈴「いえいえ大丈夫です。この位何ともありませんよ！」

そう言つて笑うメーリンさんの足運びは確かだ。本当に無理をしているという訳でないらしい。

そして、いざ私も中庭手入れの手伝いを始めたのだけど、これがもうきつい。

何がきついってそもそも広さがヤバイ。金持ちのイメージとして無駄にクソ広い庭が使われたりするが、本当にそのイメージ通りの光景。

こんな所をやるって時間かかるし、何よりも終わらねえ…と気力が減つていく事請け負いだ。

「やば、やば……これいつになつたら終わんの……? てかメーリンさんはこれを一人でやってるってマジ?」

美鈴「いえいえ、流石に門番の方もありますから。大事な所だけ私がやってお水やりとか簡単な事はメイド妖精さんに任せたり、月下さんや咲夜さんが引き継いでくれますから」

「その月下さんが、何か外で勉強するって言ってたけど」

美鈴「聞いてますよ。月下さんの指導を受けるのは大変だと思いますが、あなたにとつて無駄になることはないので、頑張つて下さいね!」

「月下さんもそうだけど、私には咲夜さんも正直キツイなあ……すっごい睨んでくるの。後、二人の小競り合いに巻き込まれるのがね。皆よく平気だよね」

美鈴「あはは……まあ月下さん咲夜さんのお二人にとつて、レミリアお嬢様は母親みたいなものだからねえ。お互いお嬢様を取られたくないという感じでしょうか。そう思うと、可愛くないですか?」

母親あ?あの幼女が?

つてか可愛いって……どう見たらそんな考えになるんだか。

「美鈴さんは、二人の事に詳しいんですか？」

美鈴「ふふふ。何を隠そう、お二人に体術指導を行ったのは私！なので実質、月下さんと咲夜さんは私が育てたと言っても過言ではないのですよ！」

ふふん！と得意気にしていると、ところ悪いけど、生憎二人が戦つてゐる所を見たことがないんだ。

フラン「あ、お姉さん。ここに居たのね！」

「あ、フランちゃん！おはよー」

美鈴「おはようございます。妹様！」

フラン「お姉さん、今日は美鈴のお手伝いをしてるの？」

「うん。月下が青空教室をするらしいから、その準備が終わるまでだけだね」

フラン「青空教室…？何それ、なんだか面白そうね！ねえねえ、私も連れてつてよー
！」

「え？私に言われても…」

日傘を片手に、フランちゃんが青空教室に連れて行ってとぴよこと跳ねる。ただ、青空教室は私が提案したことじゃなくて月下の言い出した事だ。連れていってと言われても困るんだよなあ。

フラン「ダメ…？」

「う…ん…月下さんに、聞いてみようか」

フラン「あは♪そうでなくちゃね！」

「ああもう、可愛いなあ…」

柔らかな金髪を撫でると、嬉しそうに目を細めて手に頭を擦り付けてくる。

さながらなついた相手に好意を示す猫のような姿は、なんかもうほんと可愛い。やだ最高…

月下「待たせたなシスター。青空ハイスクールの時間だぜ！夕方までには帰ってくるから、メーリン。それまでしっかり頼むぞ〜」

美鈴「はい！お任せ下さい！」

「月下さん。あの、フランちゃんが一緒に青空教室に来たいみたいなんです…」

月下「え？普通に嫌だけど？」

普通に嫌だけど!?!? どういう事なんだよ!?

フラン「ええ、そんなこと言わないで、フランも混ぜて欲・し・い・な？」

月下「いだだだだだだ!?!? 分かった分かりましたから!?!? ひび入りますので！」

フランちゃんが月下の腕を握り込むと、結構嫌そうにしていたのに簡単に意見を変えた。

月下「……………フアック。何で俺が妹様の暇潰しに付き合わなきゃいけないんだ……」

フラン「何か言った？」

月下「h a h a ……何でも無いっす」

・
・
・

「で、外に出ただけど……勉強するだけなら別に出なくても良かったんじゃない？」

月下「実物を見た方が早いだろ。安心しろよシスター。さつきお弁当は作ってきたぜ！普通の家ではまず食えない最高品質の…ハンバーグ弁当だ！」

「あ、時間掛かってたのってそういう。いやそんな心配してた訳じゃないし」

月下「おっと！分かってるゼシスター。お弁当ということは、時間が経って冷えちゃうのが心配だよなあ？だが俺はな、炎系統の魔術が得意なんだ。お弁当を温めるくらい何てことないんだよ！」

フラン「世界一無駄な魔術の使い方だね」

って待って。今さらつと流しちやっただけど魔術とか言った？

実在してるの？いや、そういうえば魔理沙は魔法を使ってたね。それと同じものなのかな？

「魔術って、魔法と同じやつですか？」

月下「ゼーんぜん違うな。例えるならイクラ軍艦とネギトロ軍艦位違う」

それは具が違うだけで同じものでは？私は訝しんだ。

月下「その説明は後にしてまずはシスターも気にしてた、何で青空教室なんかをしてるかの理由だが…理由があつてな。お嬢の下に尽くす者として、大事な仕事があんだよ」

「大事な仕事？」

月下「シスターは妖獣つて、知ってるか？」

妖獣…私が幻想郷に始めて迷いこんだ時に襲われた化け物の事だ。

幻想郷には人里等の限られた場所は当然として、その場所以外であつても人を殺し過ぎてはならないという妖怪の中限定の決まりがあるらしい。

幻想郷の人間自体そこまで多い訳でないの、減りすぎない配慮をしているようだ。

ただ、妖獣と呼ばれている奴等はその限りじゃない。こいつらは何といつてもその狂暴性が問題だ。

おまけに、妖怪なんかと違って話し合いができる知能もない。人間を見かけたら、本能のままに喰い殺してしまう。そんな奴等だ。

「……………話し合いの出来ない、人喰いの化け物です」

月下「おお、そんだけ知ってりゃ十分だ（ガリ）」

月下「その通り。妖獣ってのは害獣だ。あいつらの出す被害が多いと、うちが殺つて
るなんて疑われる」

月下「迷惑な話だよなあ。痛くもねえ腹を触りに境界お姉さんが来るとかよお…ほん
と、いい迷惑だ、なあ？（ピツピツ）」

「あの、月下さん？さっきから指噛んで何してるんですか？」

月下「血を出してそこらに蒔いてる」

「何で、そんなことを？」

月下「そんなの害獣を集めたいからに決まってるんだろ」

「うっそでしょ!？」

???「……………ウウウウウウ」

妖獣は血の匂いに敏感だ。月下が指を少し噛んで血を数滴散らしただけでも、匂いを
嗅ぎ付けてくる。

私が低い唸り声に動揺している間に、始めて幻想郷に来た時のような不定形な獣が私
達の様子を伺っている。

月下「多いな。やっぱ駆除に来て正解だったみてえだ。シスター、取り敢えずお前は

戦いの空気に慣れるようにな」

「頭おかしいのかお前!?! フランちゃんもいるのに何考えてんの!?!」

月下「大丈夫だつて。今日はちゃんとコイツを持ってきてんだからよ」

月下の持つてきたコイツ：それは身長約半分少しの長さの長剣だった。

長剣の不自然な切れ込みが無数に入っており、さながら百足ののような異質な印象を受ける。

月下「シスター、お前はこう思っているだろう。自分より弱い奴に教わることなんかねえよと」

「いや、そんなこと思っていないけど」

月下「それは俺もそう思います」

「月下さんの感想じゃねえか!!」

月下「なので、研修ついでに一度俺の実力を見せておこうかと思いません。シスターはちゃんと見ておくように」

フラン「やっっちゃえ月下」

「え、ええ?でも、危ないよこんなの…」

月下「iiiiiiiiiiiiiiiiiiii::HAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAAAAAA!!!」

咆哮と同時に、月下が妖獣の群れに突っ込んで行く。

本来なら、妖獣と人間ならどうあつても人間に勝ち目はない。それだけの力の差があるんだ。

けど、月下は長剣を目茶苦茶に振り回して妖獣を屠っていく。

一撃でも肌に直撃すればただでは済まない筈なのに、恐怖なんて無いかのように斬り、砕き、千切る。

フラン「ひゅー！かっこいいよー」

「…か、怪物だ…」

月下は自分の事を一応人間だと言つてた。でも、今こうしてあの人の戦つてる所を見ってしまうと私と同じ人間だとは思えない。

狂喜の叫びを上げながら人外の怪物を喰い殺す…怪物だ。

フラン「んあ?」

「フランちゃん!危ない!」

月下「!」

月下の戦いに目を奪われていると、すぐ近くまで妖獣の接近を許してしまった。

咄嗟にフランちゃんだけは守ろうと抱き締めて目を閉じる。

が、痛みは来ない。恐る恐る目を開けてフランちゃんも私も無事なようだ。

「フランちゃん、大丈夫だった!」

フラン「え?まあ大丈夫だけど」

私達を襲ってきて来ていた妖獣と月下との距離はかなりあった。普通なら、もうどうしようもない必中距離だった。

けど月下は間に合った。何故なら、長剣の長さが大幅に伸びていたから。

自分の目で見ても信じられないのだけど、模様毎に剣の刀身が分裂し、それを一本のワイヤーか何かで繋げている。

冗談抜きで百足のように剣の関節という表現をするしかない姿で、関節の一つ一つが

一定の開きができる事によって、攻撃射程を伸ばしていた。

月下「いけね。テンション上がり過ぎてやらない事まで忘れる所だった」
「やらない事やいけない事？」

月下「青空教室だよ。俺が皆殺しにしちや意味無かったわ」
「今までは青空教室じゃなかったと!？」

月下「続きだよ続き。そうだなあ…じゃあさつきシスターが気にしてた魔術と魔法の違いにするか！」

「いやいやいや、あんたマジで頭のネジ飛んでんの!?!今、妖獣に攻撃されてるの!危険なの!分かる!?!」

月下「はー?何言ってるんだシスター。俺がいる場所は、幻想郷一安全な場所なんだぜ!」

「さつき普通に危なかったよね!?!」

月下「hey heyシスター。人の話はちゃんと聞くもんだ、ぜ!と。まず魔法と魔術の一番の違いは、人間が使うかそれ以外の奴が使うかかってのがあるんだ」

え、マジで説明続けるの?リアルタイムで戦いながら?

命の危険がずっとあるなかで？こんなん集中出来るわけないだろ!!

月下「魔術っていうのは、そういう人外に立ち向かうために第六物質。マナという存在を定義して力を借りる事でそういう存在に対抗できる術：魔の者に対抗する術という意味で『魔術』なんだな。俺はルーン魔術派だけど、この国でも巫女とかが魔術の亜種を使ってるよ」

真面目に解説してくれるのはいいんだけど、内容がちよっと難しいよ！

つてか集中できねえ!!こうして聞いている間もずっと妖獣の襲撃は続いているとか止めてくれ…

月下「…という事だ。分かったか？」

「…いや、その、全然集中出来ないです…」

月下「聞けよ人の話！耳をフアックすんぞ!!」

「突然の耳レ??止めてよ!」

月下「んまー、これまでそういうのとは無縁だったしな。流石にムズいか…どうしよ

……せや!」

月下「シスター。お前の能力で俺の魔術を使えないか？」

「月下さんの？」

月下「ああ、見とけ：『イージス』！」

何かの宣言後、月下の左腕に一枚の盾が構築された。

それは妖獣の爪や牙を通さずに受けきった後で、盾で殴り頭蓋を吹き飛ばされた妖獣は地面に沈む。

察するに防御魔術らしい：何で攻撃に使ってるかは分かんないけど。

月下「どうだ？」

「……………駄目みたいです。月下さんの思念が上手く読み取れません」

フラン「思念？」

「うん…私の能力って、月下さんの推理した記憶を読み取るとは、ちよつと違うんだ。トランプとかで、どっちを取られたくなさそうだなーとかが分かる程度なの」

フラン「あー、だから昨日お姉さん大勝してたのね。お姉様が半泣きになるほどに」
「だ、だって手加減するなって言うから…」

フラン「ナイスー♪」

レミリア、ごめんなさい…私は能力で勝ってました。引きたきや引けばって分かったのも私の能力のお陰です。ここに懺悔しておきます…

月下「要するに、シスターが前みたいなスペルの真似撃ちをするには、そいつの考え
てる事を理解しなきゃダメって事で」

月下「てことはあれか。魔導具前提とか魔力とか妖力とか人間には再現不可能なもの
ダメか、そうだろ？」

「う、うん…」

月下「なら俺のは大丈夫だな。シスターが俺を理解してくれりゃ、その内使えるよう
になるかもな」

「理解、か…」

フラン「ねーねー月下ー。お昼ご飯にしましょうようよくお腹が減っちゃったわ」

月下「了解っす！って訳だ、お片付けさせて貰うぜ。『クールド・ボルグ・カリ
バー』あああああああ!!」

月下の長剣が突如炎とも雷とも言えるような列光を纏う。

集中したエネルギーを宿した剣を地面に叩きつけた瞬間、光は妖獣達に殺到してジュアツという焼けるような溶けるような音と共に骨も残さず消滅させた。

私にも使えるかも知れないと言っていたので、これも月下の扱う魔術なのだろう。でもこんな凄まじい威力すら出せる技術を、私にどうにか出来るのかな：

月下「F o o ! 気持ちいい！ 害獣駆除完了！ お嬢、見てましたか！ お嬢の騎士が、今日も活躍しましたよ！」

フラン「寝てるんじゃないかな？ そんな事より、ごーはーん！」

月下「お待ち下さい。今温めますから。シスター、お前も早く座れよ」

「ああ、うん…」

月下への理解：レミアアへの忠誠が絶対で、口が悪くて、スパルタ教育な人。
私は、この人を理解出来るだろうか：

・
・
・

おまけ

朔日 月下 友好度 1

月下「それにしても、物好きな奴だな。幻想郷にいる奴なら、お嬢の事は多少なりとも聞いてるだろうに。態々ここに訪れるとは」

月下「命知らずというか、鈍いだけなのか……まあ、見てる分には嫌いじゃねえけどよ」
「まあ、興那さんもこの事は死にたいならって評価をしてたしね。暗に、近付くなつてのは分かつてたよ」

月下「じゃあ、その『死にたいなら』って所にシスターは何で来たんだ？」

「阿求が出してる求聞史紀つてのを見た事があつて。その時はうわ怖……近寄らんとこつて思つてただけどね」

「でもそこに従つてる人間が居るつて書いてあつて。どっちも強制されて働かされてる訳じゃないつてあつたから。信用出来るかも？つて」

月下「アキュウ……あの毒吐きキツズの事か。あいつわざと大袈裟に書くときあるから正直嫌いなんだよな」

「毒吐きキツズで」

月下「まあでも、数ある候補の中からお嬢を選んだシスターは正しい。良い選択をしたと言えるな」

「因みに、何で月下さんはレミリアに従つてるの？」

月下「そんなの決まってるだろー？お嬢への…愛ゆえに！」

「ブレないなあ…」

月下「イヒヒ！シスター、お前にもすぐに分かるさ。お嬢こそが、我が世界そのものになるとな！」

少しだけ月下と仲良くなれた気がする。

通常弾「魔術」を習得しました。

第7話

美鈴 「今日の監督は私の番です！」

「よろしくお願いします、美鈴さん！」

美鈴 「はい！何を始めるにも、まずは正しく体を作る方法を学びましょう」

「体力作りって事かな？了解です！」

ここは幻想郷という隔絶された人妖が住まう土地。その中でも、私は吸血鬼の棲む紅魔館での生活を続けていた。

私は普通の人間である。なので、初日から今に至るまで何度も死にかけてし、危ない目に何度も遭ってきた。

ただ、そんな危険と隣り合わせの生活も数日経てば色々慣れてきてしまった。

いや、慣れたと思わないとしんどいものがあるからかもしれないけどね。

ただ今日は比較的安全だ。武術に通じているという美鈴さんは、人間の限界というのをちゃんと分かっている。

どこかの誰かさんみたいに、いきなりデスゲームに放り込まないし、度胸付けるために妖獣の所に連れてつたりしない。それだけでも私からすればありがたい。

「でも私、格闘技とかやった事無いんですけど、大丈夫ですか？」

美鈴「勿論！危ないからいきなり無理な事はしないよ。ちゃんと段階を踏んでいこうね！」

「そ、そうだよね…うう」

美鈴「え。ど、どうしたの？」

「いや…普通そうだよねって、感動しちゃって…そりゃね、私だっておかしいのは分かっているよ。いきなり理不尽ゲームとか実戦はおかしいよ…」

美鈴「はは…御愁傷様」

因みに、今日はここの主であるレミアはどこかに出掛けているらしい。だから敷地内での指導をしてきているという訳だ。

そうしておかないと、妖怪とかに攻撃されるかもしれないからね！

美鈴「任せて下さい！最終的には、貴女を月下さんや咲夜さんに認められるほどに鍛

えてあげます」

美鈴「お二人に勝つ第一歩。基礎作りからね。行くよ！」

「はー！」

別に、月下や咲夜に勝ちたいとかそういう訳では無いんだけどね。

ただ、私が受けた過去を変えるという使命を為すためには、危険を避ける事は出来ないかもしれない。

幸いな事に、幻想郷に来た直後に記憶を送れたので霊夢が病死するまでは時間があ
る。原因も突き止めないといけないが、危険に対して自衛が出来なければ話になら
ない。

だから、遠回りでも今はこれが私の出来る最善の行動のはず。

「ちよ、ちよつと待って、くだ…」

…の、はず何だけど。基礎作りの段階で、私は息が上がってしまっていた。

いや、これは普通に人間のスペックだときついだけでこの人が体力おぼけ過ぎるので
は？

別に転んだりとかしなれば怪我しそうとかじゃないけど、単純に体力の差を感じる。

美鈴「はい、一旦休憩にしようか。どう？普通の人には結構キツイんじゃないかな？」
「ゼヒュー……ゼヒュー……す、うん」

まあそれでも、月下のしごきに比べれば命が懸かってないだけ遥かに気楽だけど。

時折休憩を挟みつつ、美鈴さんの元で体力作りに励んだ。

流石に一日そこらでは体感できる程にはならないが、そのうち楽になりすぎて物足りなくなるよと笑っていた。

美鈴「じゃあ次は組み手……の前に、拳の握り方を教えておこうかな。はい、どっちでもいいから拳を作ってみて」

「拳？じゃあ……ギョツ、と」

美鈴「ああ、その握り方は良くないね。親指を痛めちゃう」

美鈴「一度手を開いて。そして、小指から薬指。中指人差し指親指って一本ずつ順番に握り込むの」

「えっと、小指…薬指、中指、人差し指、親指…こう？」

美鈴「うん！親指を人差し指に乗せるんじゃないやなくて、体のある内側に寄せれば完璧！」

どうやら、拳の握り方一つにもやり方があるらしい。

親指を人差し指や中指で包む握り方。親指を包み込まず、外側から人差し指の第三関節に乗せる握り方。

美鈴さん曰くこの二つはよろしくないらしい。正解は親指を包み込まず、親指は第二関節に寄せておくのが正しいみたい。

美鈴「軽くでいいからそうだね…その壁でも叩いてみて。軽くだよ？突き指しちゃうからね」

「分かりました。軽く、ね」

親指を人差し指と中指で包む握り方。これは素人にも分かるくらい本当にダメだ。

親指を握り込んで分、人差し指と中指が拳頭より先に殴る目標に当たるので、衝撃が親指の根本に集中してる。

本当に、軽くやっただけで突き指になりそう。この握り方で殴つたりすると、骨折

するんじゃないのかな？

次いで親指を包み込まず、人差し指の第三関節に乗せる握り方。

これは単純に握る力を込めにくいというのと、親指が拳頭より先に当たって怪我をしやすいとの事だ。

そして正しい握り方である親指を握り込まずに第二関節に寄せておく握り方。

これが正解つてのは納得だ。これまでの握り方と違って親指に負荷がかからないし、何より力を込めやすさが違う。

当てるべき一番硬い部分である拳頭が何にも阻害されてない。なるほど、これが正しい握り拳の形なのか。

「理解は出来たけど……まだ意識しないとちゃんと出来ないなあ。親指が、ちゃんと動いてくれない……」

美鈴「慣れだよ、慣れ。何度も繰り返して癖付けて咄嗟に出来るようになったら、一歩成長だよ」

「鍛練に近道は無いつて事ですわね」

美鈴「そだね。だからまずやるべきは、正しい力の使い方。力は自分の身を守るのに必要だけど、変な使い方をすると逆に自分を傷つけちゃうから」

美鈴「私の教えが、少しでも君の糧になればと思つてます！」

ええ人や…本当に。ここまで丁寧に教えてくれるだけで良い人柄なのが伝わってくる。

これが月下なら、瓦割りやるぞ！やつてみせたからお前もやつてみる！とか言い出しかねないんだよね…

美鈴「拳の事を学んだ後は、蹴りの時の足の使い方。仕上げに軽い組み手をするよ。しっかりと着いてきてね！」

「はー！」

なんだろう、ここまで数日過ごしてきた中で一番充実というか安息出来ている気がする。

まあ、同僚の行動に振り回されるのに比べたら、特に難しく考えずに体を動かしてるだけの方がマシだと思えるのか。

美鈴「それにしても、君って我慢強いんだね」

「我慢強い?」

美鈴「うんうん。こう言っちゃだけど、普通の人が新しくお嬢様の下に就くのは珍しいんだ。それに月下さんや咲夜さんが色々教え込んでいるんでしょ?嫌になって逃げたくならないのかなって」

「うーん…確かに美鈴さんの言うことも分かるんだけど…」

「まあ、初日に比べたら大抵の事は大丈夫でしよって、慣れましたね」

美鈴「はは…きつと、あなたは、大物になれますよ」

そう、紅魔館に来た初日…地下室に閉じ込められて脱出ゲームとかされたのに比べれば…

毒ガスとか水責めとか吊り天井とかに比べれば…大抵の事はそれより危機度は低いからね!無問題。

月下『紅魔の全従業員に告げる!お嬢が帰ってくるぞ!全員、正門前に並べえ!!』

美鈴「おっと、お嬢様達が帰ってきたみたい。今日はこの辺にして、お出迎えに行こっか」

「はい!」

卒業試験にお使いをやらせるセンスよ

「お使い、ですか？」

レミリア「ええ。暖炉でマシユマロでも焼いて食べようと思っていたの。でも肝心の薪を切らしてたみたいだね。路銀は渡すから買ってきて頂戴」

「…木なんて、近くに生えてるのを持ってくれば良いんじゃないですかね？」

レミリア「嫌よ。私は早くマシユマロが食べたいの！あなたはこの私に乾くのを待てと言うつもり？」

「待てば、良いんじゃないすかね？」

私の目の前で、マシユマロみたいに柔らかかそうなほつぺを膨らませて我が儘を言っている幼女のせいで、今日の私の仕事はお使いに決まった。

そもそも今日は私が紅魔館での一週間が終わる日。明日から別の場所で活動をするのだけど、何で最終日にもなってお使いなんて事をしなきゃなんだろう…

「月下さん…炎の魔術得意でしたよね？だったらその辺の木でも使えないんですか？」

月下「知らないのかい？シスター。煙を出さねえようにするなら乾いた薪にするべきなんだ。これは、炉心の温度を高い状態にしたいけど、水分を含む生木だと水分で温度が下がっちゃうからなんだ」

「あ、そうなんです。知らなかったな…」

月下「つーわけだからよ、無いんなら仕方ねえよなあ？」

咲夜「存在しない物は使うことも出来はしない。だからこれは仕方ないのよ」

レミリア「そうそう。仕方ない、仕方ない」

「？」

なんか、いつもと違って皆の言動にわざとらしさがあるような気が…

そもそも、月下と咲夜が二人揃って薪が無いのを忘れてたつてのがね。多少言動はアレでも、優秀なのは間違いないのに、違和感あるような…気にしすぎなのかな？

まあとにかく、人里まで行って薪を買ってくれば良いわけね。

レミリア「私の部下だと名乗るなら、幻想郷でのお使い位はこなしてみせなさい。そ

れが出来たら、そうね…ふふ、良いことがあるわよ」

「良いこと？まあ、分かりました。じゃあちよつと行つてきます」

咲夜「持ち運べる程度で良いからね。無理しなくても大丈夫よ。はい、お金」

月下「服装もバツチり決めとけよ。未来はどうあれ、今はお嬢の部下だからな。誰に見られても問題ないように、キュツと」

「ふ、二人とも…ちよつと、そこまでしなくても…」

月下「あと、これ。グローブとレガース。メーリンが教えたつても、まだ慣れてないだろ？取り敢えず着けとけ」

時折きつくかないか、重くないか等を聞きながら咲夜と月下の二人がテキパキと私の服装回りを調整している。

私自身にされている事なのに何をされているのかよく理解できず、されるがままになつていた。

実際には対した時間は経っていないのだろうけど、着付けをされるだけで何だか疲れしてきた。たかがお使いで大袈裟なんじゃないかな…

咲夜「……………よし。大丈夫でしょう」

月下「……………ああ、問題無さそうだな」

「お、終わりました？なら、もう、行ってきます…」

レミリア「期待してるわ」

「あいー…」

レミリア「…」

レミリア「……………」

レミリア「……………」

レミリア「さて、と」

・
・
・

美鈴さんに挨拶をして紅魔館を出る時に聞いてた人里の方へと歩みを進める。

過去に戻ってくる前は人里以外には行かなかつたから、ちよつと不安だ。

そういうえば、人里といえれば絶望の未来が訪れていない今の時間なら、稗田さんや慧音さんはまだ無事なんだよね。

ただ、今の私はまだ彼女達と出会ってないから…まだ生きてるのは嬉しいけど、気軽に話せないな…

「…今はレミリアのお使いをこなさないかね」

稗田さんや慧音さんだけじゃない。もっともっと、話したい人がこの時間には生きてる。

私は、そんな皆を救うために、皆に託されて過去へと戻ったんだ。

だから今は…いずれば、またみんなと過ごせる明日の為に…私の出来る事をしていこう。

「それにしても…ちよつと重いな…」

紅魔館から出る前に咲夜と月下がしてくれた着付けの中で、私には二つ新しい装具を付けられた。

グローブとレガース。拳と足の保護をするための防具なんだけど、紅魔組では少し違う。なんとこの二つに、砂鉄を詰め込んでいるらしいのだ。

部分的ではあるものの、鎧の防御力は据え置きのままに体の動きを阻害せず、攻撃として相手に使えば人間の力でも破格の威力になり得る、というとんでも装備だ。

ただ、それでも私には全然重たい。最初の調整より軽くして貰ったけど、鍛え始めて一週間程度だから私そのものが対して強くなれて無いんだよね。

「ちよつと慣らしながら行くのか」

幻想郷の人里では人間は襲つてはいけない。誰が決めたか知らないがそういうルールがある。

だが裏を返せばそれ以外の場所でなら人間を殺しても構わないと言ってるようなもの。

まあ、さすがに用事があるなら護衛を雇ったりしてるからそうそう死ぬような事は無いらしいけど。

で、今現在一人でブラついて人里に居ない私はそんな妖怪達にとって格好の獲物という訳だ。

「！・うおつと!？」

ヒュッ！と私に向かって迫る風切り音から逃れる為に、とにかくその場から必死に飛

び退く。

とすつとすつ、と近くの樹に何か当たったみたいだけどその正体を確かめる暇もなく、また次の風切り音が迫る。

「くそ、何処!?!」

相手は私に姿を見せずに私を殺しきるつもりらしい。ほとんど勘だけで避けてるけど、いつまでも続くものじゃない。

「通常弾（魔術）!!」

こつちがいくら持ちこたえた所で、見逃してくれはしないだろう。だから私も、今使える技術で応戦する。

僅かな風切り音を頼りに少しずつ相手の方角、どういった移動をしているのかを確かめ、それまで適当に撃っていた魔術弾を今度は襲撃者の居場所に撃ち込んだ。

「外した!?!んなろおお!!」

「!?」

魔術弾は外れてしまった。それを見た襲撃者が勝負をつけるために大技か何かの準備で一瞬攻撃の嵐が止んだ。

魔術弾は外したが、大まかな位置は変わってないはず。再び魔術弾を作る隙までは無かった私は、反射的に近くの石を蹴り飛ばしてやった。

うまく襲撃者の不意を突けたらしい。飛ばした石は弾いた様だが、今まで影すら捕らえられなかった襲撃者の姿を補足した。

「美鈴さん直伝…閃脚!」

その速さ、光の如し…というのは、美鈴さんのみたいに強い人が使った場合。

慣れない砂鉄入りの重い装備という条件もあり、美鈴さんのようにはいかない。

ただ、砂鉄レガースの重さは威力に変わる。左回し蹴りは防がれたけど足を落とした瞬間、今度は右から頭部への蹴りを繰り返す。

今ので人間の出せる威力を越えているのを悟ったのだろう。今度は防がずに避けようとしたみたいだ。

「……なるほど、反応は悪く無い」

「さて、と。お顔を拝見させて、…え？」

私の蹴りを避けようとした襲撃者だが、直撃こそしなかったものの、完全に回避は出来てない。

少しだけ私の蹴りが当たったのだけれど、襲撃者はなにやら仮面を着けていたようで、それにヒビを入れるのが限界だった。

仮面のヒビが広がり、せめてどんな奴が私を襲ってきてるのかを見てやろうとしたのだが、今回の襲撃者の顔を見て私は思わず面食らってしまった。

「あの…何してんですか、咲夜さん？」

だって、この襲撃者の顔はどー見てもさっきまで私が居た紅魔館のメイド長、十六夜咲夜でしか無かったんだから。

咲夜？「咲夜？一体何の事を言っているのかしら？」

「いや、顔も声も服装すら咲夜さんじゃないですか。あなたみたいな人二人も三人も居ないっすよ」

咲夜? 「誰と勘違いしているのか知らないけれど、私は咲夜とかいう人間じゃないわよ。私は……」

咲夜? 「ナイフの一般妖精だから!」

「いや人工物の妖精なんて居るわけじゃないでしょ!?せめて付喪神なら分かるけど!」

咲夜? 「あー、じゃあそれで」

「じゃあそれで!」

な、何なんだこの人……妖精だと名乗ったと思えばじゃあ付喪神でいいやつてどうゆう事なの……

「あの、咲夜さんも知ってると思うんですけど私、レミリアお嬢様のお使いが、あるんですよ」

咲夜? 「だから何? 私には関係ない」

「ええ……」

咲夜? 「まあ何にしても、ここから先に通す気は無いわ。文句があるなら……分かるで

しよ?。」

そう言つて咲夜さん…いや、ナイフの付喪神は両手指でナイフを鉤爪のように掴む。
…何のつもりかは知らないけど、やる気満々という訳だ。

咲夜? 「安心しなさい。空を飛べないあなたの為に、緋想天レギュレーションに合わせてあげるから」

「…態々相手に合わせるのか…てのと、初対面の相手が飛べない事何で知ってんだよとか、聞くのは野暮だったりする?」

「…いいや、そっちがそのつもりなら…胸借りるつもりでやらせて貰います…行くぞお!!」

…

緋想天レギュレーションというのが私にはよく分からないけど、戦う条件を同じにするって認識で良いのかな?

使える技は何だつて使つたけど、咲夜に膝を着けさせるのも無理だった。

結果的に、手加減されたまま向こうが構えを解いた。

「ぜえー…ぜえー…なるお…ま、まだ…やれ、る…!」

咲夜? 「…この辺にしておきましょうか。あなたには、やることがあるし」

「は、はあ!?!あんたから、仕掛けてきたんだろが!」

咲夜? 「飽きたから放してあげるわ。それとも…死ぬまで続ける?」

「……………いや、もう何も、してこないなら、いい!」

咲夜? 「賢明ね。じゃ、私の役目は終わったから帰るわね」

「……………何なんだ、本当に…」

肩でしている息をゆっくりと落ち着け、持たされていた飲み物に口を付ける。

今の一戦で私はしばらく動けそうに無いのに、咲夜さんは息一つ切らしてなかったな

…

「ていうかあの人…マジで何しに来たんだ…」

本人はナイフの付喪神とか言い張ってたけど服装とかそのままだったし、隠すつもり

を感じない。

邪魔をしに来たかと思えば、飽きたから帰るって…

「とにかく、ちよつとだけ…休もうかな…」

紅魔館から人里まで距離は結構ある。近くに危険は感じないし、休んで行こうか。

・
・
・

咲夜…ナイフの付喪神の襲撃を何とかした後は、以外と順調に人里に辿り着いた。

幻想郷に始めて来た時のように妖獣の姿も見つからない。ま、あいつらは居ない方が
良いけど。

けど人里に着くまでに結構時間が経っていたらしく、もうお昼を過ぎていたようだ。

あまりゆっくりしていると夜になると夜になるかもしれない。お使い目的である薪を買った後、
私はすぐに人里を出た。

「持って帰れるだけで良いって話だったけど、これで足りるのかな？」

持って帰れるだけという量の指定もされなかったので、片手で持てる程度しか買っていない。

あまり詳しくないけど、流石に少なすぎるんじゃないかな？

「…沢山買ってこいとは言われてないし、まいつか」

そう考える事にしました。私は別に言うこと聞いてないとかじゃないしね。やることはやりました。

謎の声 「……………りー……………ザ…」

「何だ？」

謎の声 「ザ……………りー」

「こつちに…何か、来る！」

謎の声 「ザリー、ザリー」

人里こら紅魔館への帰路の途中、奇妙な音が聞こえ始めた。

木の枝を折り、草を踏みしめる音に混じる言葉とも鳴き声ともつかない何かが、私の方へと近付いてきている。

謎の声「ザリー！ザリー！」

「うえ！？な、ええ？」

私の目の前に現れた者、それは…

ザリガニの着ぐるみだった。

謎の声「おやあ？こんな所に人間が居るとはなあ」

「しゃ、喋った!？」

ザリガニの妖怪「私は最強のザリガニ妖怪、ザリー様よ！」

「ぎ、ザリガニの、妖怪…？てか、それ着ぐるみじゃ…」

ザリガニの着ぐるみ「着ぐるみじゃないわ！最強の妖怪、ザリー様よ！」

「お、おう…」

等と言っているが、甲殻類のような固そうな殻じゃない。何なら布にしか見えないか

ら。

あ、でもハサミは動くんだ…って手！普通の手がハサミの中から見えてるぞ!?

「その、最強の妖怪ザリー様が、何の用ですかね？」

ザリー様「くつくつくつく…なあに、直ぐに済むんだけどね」

ザリー様「ぎやおー！食べちゃうぞー！」

「ああ、そういう奴ね!!」

素早く反転。来た道を全速力で引き返す。一度振り返ってみたけど、ザリガニの着ぐるみは移動してない。

それにしても、変なのに絡まれてしまったものだ。大回りになると道が分からないから紅魔館に帰れるか不安なんだよね…

ザリー「ぎやおー！逃げなきゃ食べちゃうぞー！」

「うわああああああああああ!!?!」

結構距離が取れて余裕だと思ってたのに、気が付くとすぐ真後ろまで迫ってきてい

た。

驚いたけど、すぐに90度方向転換。今度こそ逃げる。

ザリー「逃がさないいい！」

「ひいつ!?!」

なんとザリガニの着ぐるみは、一度樹にへばりついて方向転換した私に高速で突進して来たのだ。

でかいザリガニの着ぐるみが喋りながら襲ってくるという異常事態に恐怖し、地面に転けた。

それが私の命を救った。倒れた私の真上をザリガニの着ぐるみが通過していき、ザリガニは樹に張り付いた。

「は、この野郎…」

ザリー「あら？もしかして戦うつもり？」

見た目はどうあれ、あのザリガニの着ぐるみのスピードからは逃げられない。

ならもう、戦って活路を見出だすしかない！

ザリー「そういう事なら、楽しませて頂戴？行くわよ、『レッドスプラッシュ』」
「うっそだろお前!？」

てつきりさつきと同じように突撃してくると思つてたんだけど、その予想は大きく外れた。

ザリガニの着ぐるみの回りに、いきなり真紅に輝く魔方陣のようなものが浮かび上がり、そこから無数の弾幕が射出される。

ザリー「あーははは！どうしたの？そんなんじや逃げる事も出来ないわよ！」

「やってやる…サムワンスメモリー…インストール『グレイソーマタージ』!!」

ザリー「！ おっとと」

ザリー「なるほど、これが月下が言つてた…へえ、これはなかなか」

「ぶち抜く…」

ザリー「あ、やべ」

唯一使える遠距離攻撃である通常弾（魔術）程度じゃ、あのザリガニにダメージを通せない。飛び交う弾幕をすり抜け、当てることすら至難の技だ。

私は能力を発動させる。誰かの想いを読み取り、可能な限りその想いと近い現象を引き起こす。

未来に生きた誰かの想いは、星形の無数の弾幕となつてザリガニに届いた。

ザリガニの動きが止まった隙を逃すつもりはない。一気に接近し、砂鉄グローブでの全力パンチを胴体に打ち込んでやった。

「死ねええええ!!」

謎の声「ぶぎやあああああ!?!」

「!?!」

ザリガニの胴体を殴った所、なんかザリーとは違う声で悲鳴が上がった。びつくりして詰めた距離を開けちやったよ。

ザリー「少しはやるみたいね!でも、私には効かないわよ!」

謎の声「ゲホッ!ゲホッ!おえ…痛った…」

ザリー「ちょっと！なにフラフラしてるのよ！しっかりしなさい！」

謎の声「む、無理言わんで下さいお嬢…受け身取れないから素人パンチでもキツイんですよ…」

さつきからザリガニの下半身がフラフラしてるんだけど。

というか、まさかとは思うけど…このザリガニの中身って、レミリアと月下なんじゃない？

ザリー「お前なら使っても平気そうね。行くわよ！『アメザ・リ・グングニル』！」

なーんかすつごく見たことありそうな炎の槍がザリガニの両手に生み出される。

相変わらずの攻撃力だけど、機動力はさつきの打撃でかなり落ちてるような気がする。

ザリー「なかなか避けるわね。悪くないわ」

「!?大丈夫なの、それ？」

ザリー「はあ？急に何よ」

火は消せても、水を吸った着ぐるみから抜けるのは大変だろう…助けずに先に帰ったらどうなるんだろ。

...

「えーっと。薪、買ってきましたよ。これだけで良いんですか？」

咲夜「ええ、結構よ。良くできました」

月下「やるなシスター！俺はちゃんと帰って来るって信じてたぜ！」（満身創痍）

レミリア「合格よ。これではあなたは、私の下僕ね！最強の妖怪ザリーを倒したのは特に評価するわ！」

「…」

咲夜「どうしたの？」

「いやどうしたもこうしたも…お使い、なんですよね？どうして、咲夜さんとかが邪魔しに来たんですか？」

「ていうかさあ…レミリアお嬢様達はここで待つてたんだよね？何で変なザリガニ妖怪と戦ったのを知ってるの？」

レミリア「え」

咲夜「!」

月下「!」

レミリア 咲夜 月下（お互いに視線を交わす）

レミリア「ふふん！何も特殊な能力というのは、あなたの専売特許では無いという事よ」

レミリア「あなたのお使いの様子は私の運命を操る力でしつかりと見させて貰ったわ。ねえ、二人とも？」

咲夜「はい、その通りです。なので私は別に付喪神という訳ではないのよ」
月下「全くです。砂鉄グローブの腹パンで悶絶してたりはしてないぞ！」

「あっそ。ならもつと殴れば良かったわ」

月下「止めてください、死んでしまいます」

ザリガニの妖怪は別に倒してないし。勝手に自爆しただけなんだよなあ…
正体なんてバレバレなのに、最後まで変な事をしてる人達だなあ。

レミリア「一度訪ねましょうか。ここで過ごして、どうだった？」

「正直、何度か死にかけたし、嫌な事の方が思い出せますね」

レミリア「それでも、あなたは紅魔館での生活に付いてこれた。もはやあなたは、幻想郷の何処に行っても生きていける筈よ」

確かに……ここ以上に濃い一日を過ごせる場所なんて無いだろう。

何だかんだ、月下や咲夜の教えてくれる技術は確かで、私の損なるような事はしなかった。

たった一週間、けれど私はかなり成長を出来たのだろう。

レミリア「あなたがこれから、どんな運命を歩むのかとても興味が湧いたわ。何かあれば、何時でも我が紅魔の門を叩きなさい。話くらいなら、何時でも聞いてあげる」

「……お世話に、なりました」

紅魔館に来てからというものの、驚かない日は無かった。毎日気を抜けなくて、怖い時もあつた。

でも楽しかった。きっと私にとって、ここでの日々は大事な想いになるだろう。

閉ざされた未来を切り開く、一欠片になれば良いけど。

・
・
・

おまけ

朔日 月下 友好度 2

月下「ホーリーシット…やってくれるよなあ…」

「月下? どうかしたの?」

月下「ああ! 聞いてくれよシスター。さつきよお、お嬢が紅茶淹れてくれて言うからさ、俺用意したんだよ」

月下「そしたらサクヤがさー、お嬢様は甘い方が好きだつて勝手に砂糖を増やしやがったんだよ」

月下「だから俺はサクヤにこう言ってやったのさ。お前は野菜が食べねえキツズがやるハンバーグソースとマヨソースを混ぜたオーロラソースみてえな奴だつてね」

月下「H A → ! H A ← !」

「よく分かんない例えだけど、レミアの事が好きな事は分かる」

月下「おう! これでも俺は、10年以上お嬢の下に付いてるからな」

「10年!?そんなに昔からレミリアと一緒にだった…あれ?」

月下「どした?」

「少なくとも10年つてことは、月下つて今何歳なの?てつきり同じくらいだと思つてたけど…」

月下「あ…それはだな…13から17の何処かだな」

「え、自分の年齢でしょ?」

月下「うん…実は俺、お嬢に付く前の歳を知らねんだよ。付いてからは10年間違くないんだけど」

「どうしてそんなことに…」

月下「お、聞きたいか?そう、あれは今から10年前の事、俺は人を守る剣、魔の者を焼く炎として戦つてた時の事だ…」

月下「人間社会に紛れ込む魔の者を狩る者達の中でも天才と呼ばれた俺は来る日も来る日も魔の者達を千切つては投げ、あ千切つては投げと…」

「ああ、もういいもういい…まともに話すつもりがないのは分かった」

月下「何だよ、別に適当言つてる訳じゃねえつてのによお」

「どうだか…」

月下「ま、そんな感じで正確な歳は俺も知らんつて事で」

少しだけ、月下と仲良くなれた気がする。

魔術 ソウエルデヴオート を修得しました！